



もんぶ か かく だい じんしやう
文部科学大臣賞

おにぎりは人も世界も繋ぐ

みやぎ けんいしのみき しりつしのみき
宮城県石巻市立石巻中学校三年

ほん だ ひかる
本多 皓

「ああ、早く日本のごはんが食べたいな。」

日本に帰る飛行機に乗った私は、母の作るおいしい料理と炊き立てのお米を想像しながら、いつの間にか眠りに落ちていました。

今年の夏、私はおにぎり大使としてオーストラリアへ行きました。おにぎり大使派遣事業は、石巻市の主産品であるお米と海苔でおにぎりを作り、日本とオーストラリアの文化交流を図ることが目的の事業です。

市内の各中学校から集まった仲間と、数回の事前研修を経て、日本を出国しました。

現地では、学校訪問とホームステイの際におにぎりを握りました。

学校訪問では、私よりも少し年上の高校生とバディを組み、おにぎり作りを行いました。はじめは作り方をうまく伝えられるか不安でしたが、コミュニケーションをとっていくうちに不安は消え、お互いに楽しく作ることができました。

「あたたかいね。」

「きれいな形だね。」

と、おにぎりを握っているだけでたくさんの会話が生まれました。日本での事前研修のときもおにぎり作りをきっかけに、それまでぎこちなかった仲間とも打ちとけ、絆が一気に深まったことを思い出しました。おにぎりは人と人とを繋ぐことができるのです。

ホームステイ先では、ホストファミリーと一緒におにぎりを作りました。握り方を見せると、手を使うことに驚いているようでした。ですが、私の真似をして一生懸命握ってくれました。初めて作ったとは思えないほど上手で、とても驚きました。

「おにぎりは日本の伝統的な食べ物で、持ち運びやすく、お弁当で食べることが多いです。」と説明しました。ホストファミリーは話を聞き、オーストラリアではサンドイッチを持つていくことが多いと教えてくれました。おにぎり作りを通して、食文化の違いも学ぶことができました。

楽しく会話をしながら食べていると、あんなにたくさんあったおにぎりは、あつという間になくなりました。

「おいしい。ありがとう。」

と日本語で言ってもらったときは、作って良かったと、心がほっこりするような嬉しい気持ちになりました。できたてのおにぎりは作った人や食べた人の心まで温かくしてくれるのです。

街の中にはお寿司屋さんがありました。ホストファミリーの家には醤油や炊飯器もありました。日本から遠く離れたオーストラリアで、日本の「ごはん」が世界に広がっていることを肌で感じました。バディやホストファミリーに、ごはんは好きかと尋ねると、

「イエス！」

と笑顔で答えてくれました。日本人としてとても誇らしく、嬉しかったです。日本のお米が、世界中の人々を笑顔にしてくれるのです。

帰りの飛行機で夢を見ました。機内食でお寿司が出てくる夢です。パンも選ぶことができましたが、私は迷わずお寿司を選びました。目が覚めて出てきたのはフルーツでしたが、それだけ日本のごはんが恋しくなっているのだと思いました。その後のバスでも、お家で食べるごはんが待ち遠しかったです。

今回、外国の食文化に触れ、改めて日本食の良さに気付きました。現地の食べ物もとてもおいしかったのですが、おにぎりを食べたときの安心感には敵わず、私はごはんが大好きなのだと思います。バディやホストファミリーにも、日本の食文化の一つであるおにぎりを知ってもらえて本当によかったです。

おにぎり作りを通して、多くの関わりや学び、発見がありました。その中で、おいしいご飯を毎日食べられる日本に生まれて良かったと心から思うことができました。日本のお米は、世界に誇れる宝物です。